

# 信濃教育

## 巻頭言

### 子どもを見る

「人はみな望む答えだけを聞けるまで 尋ね続けてしまうものだから」  
これは、吉田拓郎の歌う「永遠の嘘をついてくれ」の一節である。

「永遠の嘘をついてくれ」という歌は、吉田拓郎が「もう自分には『ファイト!』みたいな曲が作れない。遺書のような曲をお願いします」と言って、中島みゆきに依頼した曲だと言われている。このあたりの経緯は私と同年代の人間なら興味津々の話であるが、この原稿で言いたいことではないので、話を戻そう。

望む答が聞けるまで尋ね続けてしまう人のつね。それは望まない答は聞きたくない、聞こえないということでもある。「聞けども聞こえず」である。

「子どもをよく見る」と言う。望む答を聞きたいのと同じように、自分の望む姿を見たいと思っているとき、よく見ているようでいて、実は本当の子どもを見ようとしていないのではないだろうか。それがやはり人の習性であろう。「見れども見えず」である。こうなってほしい、こんな力をつけてほしいと願うとき、どうしても子どもの見たい姿を追い求めてしまう。そうすると子どもまるごとは見えない。よく見ているようで、見ていないのである。

そうならないために、こだわりやとらわれを捨てて子どもを見る(観る)ことの重要性を先輩は説いている。しかしこれが難しいのである。人はどうしても自分の価値観に縛られてしまう。

では、どうしたらいいのだろうか。

まずは、独りよがりの見方にならないために、他の人が見えているものを知ることである。他の先生には同じ子どもや授業がどのように見えているのかを知り、自分の見たものと比較し検討してみるのである。時間を削ってまでして、研究会や研修会に参加する一つの意味はここにあるのだろう。